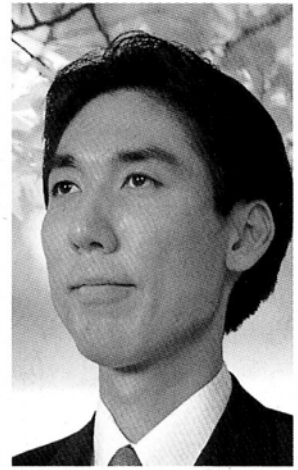


城内 実の視点！ 時代を考察する(2)

——なぜ郵政民営化に
反対したのか——



前衆議院議員・拓殖大学客員教授 **城内 実**

読者のみなさんも、日本の社会が病んでいることに気がつきはじめたのではないだろうか。戦後のいざなぎ景気を超える好景気時代といわれているが、年間の自殺者は三万人に達し、北海道の夕張市のように財政的に破綻する地方自治体が出てきている。

ついひと昔前には「振り込め詐欺」という、日本人特有の人の良さにつけこんだ卑劣な詐欺事件がはやっていたが、最近では、「金属ドロ」なる金属の窃盗事件がワイドショーで取り上げられるようになった。この「金属ドロ」なるものは、公園のステンレス製の柵や、給食用の超大型調理鍋とか、送電線とか、駐車場の乗用車のアルミホイールとか、そこら中の目につく金属をとりはずしたり、闇のルートで売りさばく窃盗事件のことである。なんと年間の被害総額は二〇億円にも及ぶという。格差社会のせいで生活苦からやむにやまれず行った犯罪なのか、それともてっとり早く換金できるということから犯罪集団が手を染めたのかよく分からないが、日本もついにここまでできたかという感じがする。

小泉総理は、「格差が出ることは悪いことではない」と豪語したが、この庶民感覚の全くない

暴言に国民の怒りが爆発しなかったことにこそ日本社会の病理が端的に現れている。マスコミもはや信用できない。国民の視点に立つようなふりをして、実際は権力側（政府、財界）に良いように操られ、時には堂々と権力の代弁者としてふるまっている。郵政解散選挙がそうであった。

マスコミの猛省を促したいところであるが、あまり期待できないであろう。なぜなら、日本の大手新聞やテレビのキー局といった寡占化したマスコミこそが、本来であれば小泉・竹中流の構造改革路線の規制緩和、自由競争の対象にならなければならぬにもかかわらず、既得権益ががちりと守られて、権力ともちつもたれつの関係になっているからである。

民主主義下の政治のほとんど唯一の存在意義を挙げるとすれば、権力の集中を排除することと、市場原理や自由競争に任せると一極集中化する富を、国民の代表である国会議員が議論を尽くして、各層に再配分することに尽きる。

郵政民営化問題もいわゆる小泉・竹中構造改革路線の「官から民へ」というかけ声の下で強引に進められた。民営化するということは、竹

中平蔵大臣（当時）も認めているように、サービスを良くする悪くするか郵便料金や手数料をあげるあげないなどについては、あくまでも経営者が（判断）することであって、一般国民がサービス内容に口出しできるはずもない。民間の私企業となれば当然のことである。国民は、民営化すれば郵便料金も安くなり、サービスも良くなると信じて一昨年の劇場型選挙において郵政民営化に賛成したわけだが、国民自身が民営化した郵政各会社の大株主か経営者にでもない限りコントロールできないし、文句も言えないことはよく考えれば容易に分かることである。

公社のままであれば、国会を通じて国民の声や利用者の声がサービスや料金・手数料等に反映させることができる。

サービスの低下は民営化を目前にしてすでにじまっている。全国で約一、〇〇〇局の集配特定局が無集配局に転換させられた。それにより、郵便物の遅配が現実のものとなっている。今年の年賀状の配達は本当にひどかった。私の次男はまだ幼稚園児であるが、一生懸命字を覚えて東京の多摩市に住む家内の両親に年賀状を

書いて送った。私も妻も子供のたどたどしい字であったので、若干手直ししたりして、これなら郵便配達の方も判読できるであろうと自信を持って投函した。その日は一月二八日であったので、元旦は無理にしても一月三日か四日くらいには着くだろうと思っていたが、待てど暮らせど年賀状が届かない。なんと年賀状が多摩市に届いたのが正月気分がもう薄れてきた一月一〇日であった。私のところにも、お年玉切手の抽選も終わった後の一月二〇日前後に数枚の年賀状が届いたが、この年賀状はどう考えても二週間近く日本のどこかをさまよっていたか、どこかでぐっすり眠っていたかと思えない。

また、私はこれまで結婚式などのお祝いごとやご不幸などのお悔やみのメッセージを料金が一番安いという理由でNTTの電報ではなくて郵便局のレタックスで送っていた。一番安い台紙であれば一通五八〇円である。

ところが、このレタックスのサービスも郵政民営化に向けた合理化路線の下、台紙の種類が大幅に減らされ、一律九〇〇円と、事実上の「値上げ」となったわけである。また、朝一番に出せば当日についたレタックスも土、日は職員

が局にいなくなるという理由で月曜日になるというように、サービスの大幅ダウンである。国民ももうそろそろ日本の伝統・文化のみならず、精神風土までむしばむこれまでの構造改革路線の害悪に気がつき始めているのではないだろうか。

プロフィール

城内 実（きうち みのる）

昭和四〇年 四月一九日生まれ

平成元年 東京大学教養学部国際関係論分科を卒業し、外務省に入省

平成二年 在ドイツ日本国大使館勤務

平成九年 天皇陛下、総理等のドイツ語通訳官

平成一四年 外務省を退官し、公募に応募

平成一五年 衆議院議員初当選（無所属）

平成一六年 党改革実行本部幹事

平成一七年 農林水産委員会委員、環境委員会委員、郵政民営化特別委員会委員

平成一七年 第四十四回衆議院選挙にて七四八票差で惜敗

平成一八年 拓殖大学客員教授